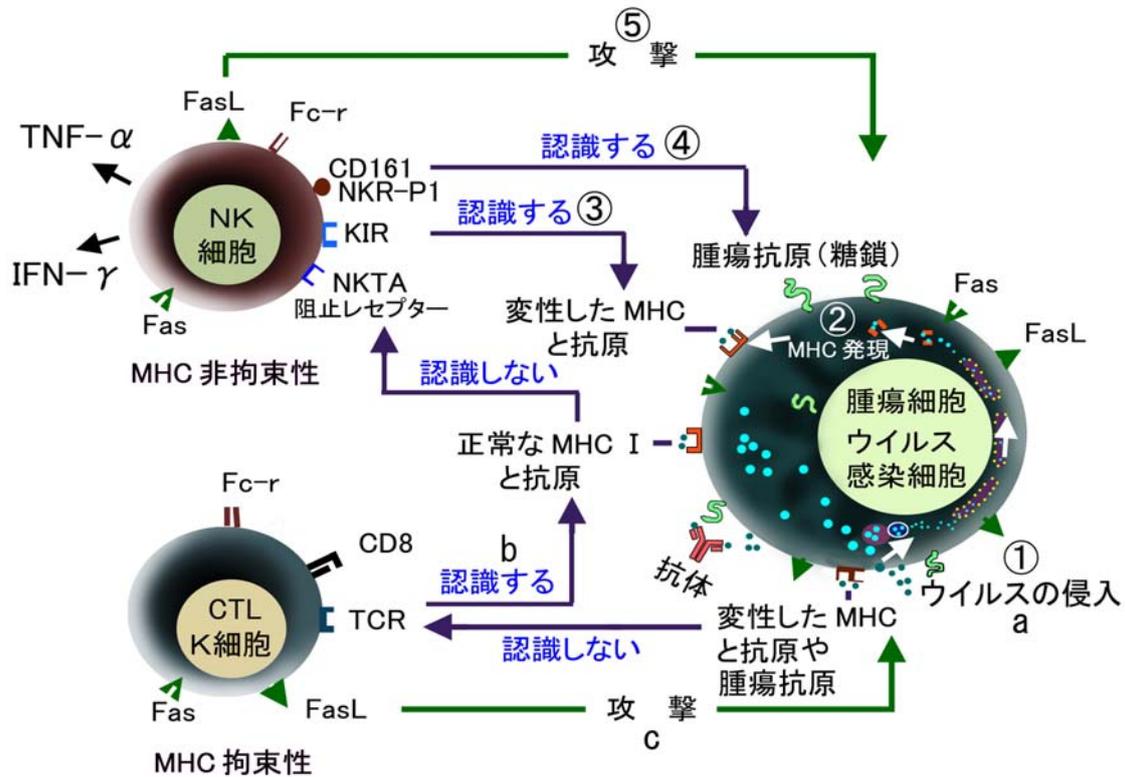


NK細胞とキラーT細胞（CTL細胞）の違い



NK細胞：

NK細胞は標的細胞の変性したMHC-Iや膜上の抗原（腫瘍抗原やウイルス抗原）を認識して攻撃する。正常なMHC-Iであれば認識できず攻撃が阻止レセプターによって攻撃を中止させられる（正常な細胞を攻撃したら大変）。ウイルス感染細胞は抗体によっては攻撃できない。膜上にウイルス抗原が発現すればB型肝炎などでは抗体（免疫グロブリン）によって免疫機能の誘導ができるが、ウイルス細胞の増殖の方が早いので感染状態は継続することになる。NK細胞はMHC（正常では攻撃しない）や抗原を選ばずに攻撃（非MHC拘束性）することができる細胞である。

キラーT細胞（細胞障害性Tリンパ球：CTL）：

キラーT細胞はCD8+を発現するTリンパ球なので結合できる細胞はMHC-Iに限定される（MHC拘束性）。抗原提示細胞やBリンパ球はMHC-IIなのでこれらの細胞は攻撃を免れる。ウイルス感染細胞や腫瘍細胞はMHC-Iの自己細胞である。感染細胞や腫瘍細胞のMHC-Iは多くは破壊されているか、発現しても極めて弱く発現している。このような細胞はCTL細胞でも認識できない。もし初期の感染細胞でMHC-I上にウイルス抗原があれば攻撃することができる。CTL細胞は正常なMHC-Iと抗原を認識しなくては攻撃できない。